

農産物貿易の構造分析

農産物貿易の構造分析

遠藤浩一 著

東洋経済新報社

著者紹介

昭和3年 宮崎市に生まれる。自由学園
東京大学大学院（農業経済専攻）博士課程
卒業。農林中央金庫調査部を経て、現在、
日本大学農獣医学部助教授。農学博士。

現住所 東京都豊島区長崎 1-9-21。

農産物貿易の構造分析

昭和46年6月1日 第1刷発行

昭和50年6月10日 第4刷発行

著者 えんどうこういち 遠藤浩一

発行者 宇梶洋司

発行所 東京都中央区日本橋本石町1の4 東洋経済新報社

郵便番号 103 電話東京(270)代表4111 振替口座東京6518

© 1971<検印省略>落丁・乱丁本はお取替いたします。 3061-4129-5214
Printed in Japan

は し が き

「日本農業はどこにゆく」。一九七〇年代の世界は、脱工業化時代あるいは情報化時代への入口に立っているとされる。こういった世界的な変動の時代にあつて、農業はいかに変わつてゆくのか。何をなすべきか。その役割は何なのか。いまや基本的レーゾン・デートルが問われているといつてもいいすぎではあるまい。

明治以来、日本資本主義の成立・発展期に、農業は、良質・低廉な労働力の提供、あるいは安い食糧の供給などをつうじて、重化学工業の縁の下での力持ちとして大きな貢献をしてきたことは多くの人の認めるところである。

さらに、昭和二〇年の太平洋戦争の敗戦によつて、日本の経済、工業力がまったく破壊され、狭い国土に多数の人口を養わねばならなかった時、まさに、農業は「食」と「職」を与える決定的な役割をはたしてきたことも記憶にあらたなところである。

「農は国の本」という言葉は、明治以来、いや日本に農業が定着した弥生時代以来の日本人の心のなかにしっかりと定着していたのであつた。

戦前の日本の農村の典型的なイメージは、稲作と養蚕に代表される「米」と「まゆ」に見出すことができる。米は日本人の食生活の中心であつたし、まゆから作られる生糸や絹織物は、世界に広く輸出され、貴重な外貨を

かせぐ重要な輸出品であった。

いま、米の消費量は、食生活の変化によって年々減少してきており、合成繊維の進出によって絹製品もかつての地位は大きくゆらぎつつある。こういった経済発展にともなう消費需要の変化に農業生産がいかに適応してゆくかということがいまわれわれの当面している課題なのである。そして、この課題をさらに複雑にしている条件として、こういった問題を世界的視野のなかで、と同時に、歴史的な展望のなかで解決しなければならぬからである。

しかし、これはきわめて困難な仕事であることも確かである。というのは、日本民族は農耕民族であって、狩猟民族ではなかった、二千年にわたる農耕生活のもつ意義は、たんに経済の問題としてのみでなく、農業技術の性格や所有観念、生活感情から思考方法にいたるまで日本人全体の生活と文化に係わっているからである。こういった多面的、基本的な要因の変化はそう簡単に起こるものではない。たとえば、畜産物消費の増大に対応する酪農や牧畜の振興は、たんに、土地や資本や技術の問題だけではなくである。

少し大げさにいえば、肉食文明と米食文明のもたらす差がそこに横たわっているといえるかもしれない。したがってそれは、たんに農民、農村だけの問題でなく、日本人全体の生活と文化がどうなっているのか、あるいはどうするのかという課題でもあろう。

さらに、農業生産力の発展も、米をはじめとして、戦後その発展にはいちじるしいものがあつた。しかし、他面、様々の歪みが生じていることも見逃すことはできない。肥料、農薬の多投による食品汚染とともに、土地、河川、湖沼などの汚染の問題がある。ここでは、従来の生産および技術のあり方自体も転換をせまられている。

というのは、品種改良、肥料、農業は、日本の農業技術の発展の三本の柱であったのに、その肥料、農業依存型技術がいままた歪みを起こしているからである。

また、現在唱えられている農業と工業の関連で考えねばならない点として、工業の農村進出に注意したい。確かに、過疎に悩み、兼業に依存する度合いが多い農村に、都市から工業が進出することは望ましいようにみえる。だが、その場合、公害を都市から農村にたんに移しかえるだけにならないか、あるいはまた、自立経営農家へ志向する農民をますます兼業へ追いやることになって、その生産力を低めるようなことにならないか。もし、いったん自然を破壊したら、その回復は絶望的であることは生態学者が切に警告しているとおりである。このことは、無計画な観光開発にもあてはまる。

われわれはいまから二五年前、全国いたるところ家は焼け、工場は破壊され、荒れはてた都市の上に立って、しかもなお、美しい緑の自然を眺め、「国破れて山河あり」と深い感慨にひたつたことを思い起こす。その時多数の前途有為の青年達は、この美しい国土を守るためにその生命を捧げたことも思い起こして欲しい。

現在、美しい緑の森林がいたるところ切り払われ、日本人の四季折々の心情にやすらぎを与えていた螢や蝶などの昆虫もその姿は稀れになり、小川には、ふなも、どじょうも見えなくなってきた。工業化、都市化は自然環境の破壊と同時に日本人の心のふるさとをも喪失させているのではないか。いまや、ふるさととはわずかにテレビの歌祭りに、はかなくうつろに存在するのみとみるのは、ひがめであらうか。われわれは、二千年にわたる日本民族の歴史と文化を築いてきたこの美しい国土を守って行く義務がある。それはたんなる農業生産だけの問題としてではなく、もっと身近にまた深く土地に結びついてきた農業・農村のこれからを考えるうえでの歴史的な課

題である。そしてそのことが、日本が、一九七〇年代の将来に向かって国際社会のなかではたしてゆくべき役割でもあるだろう。

私が農業の問題に興味をもつようになったのは、敗戦直後の昭和二〇年頃、栃木県にある自由学園の那須農場で、きびしい食糧不足のなかにあつて、鋤をふるったのがきっかけであつた。いまは亡きミスター羽仁、ミセス羽仁が日本の前途を憂へて、「晴耕雨読」の理想を語りかけられたことを思い出さずにはいられない。

本書が成るに当たつて実に多くの方々のご援助やご指導を頂いた。東京大学の農業経済学科の先生方、東畑精一先生、神谷慶治先生、川野重任先生、古島敏雄先生、加藤譲先生、金沢夏樹先生をはじめ、諸先生方に受けた学恩は、私の研究生活に大きな支えとなった。そして、篠原泰三教授には、農業経済学の面白さ、学位論文の作成にいたるまで、公私様々の面でお教えを受けたし、また逸見謙三助教授からはつねに適切なコメントを頂いた。そして昨年突然亡くなられた木下公士先生にも、ゼミナールをつうじてはげましを頂いたことを思い出して心からの感謝を捧げ、ご冥福を祈りたいと思う。

さらに、私が現在勤務している日本大学の農獣医学部長磯辺秀俊教授は、東大時代の先生でもあり、研究生活に様々のご配慮を頂き、また農経の先輩である錦織英夫教授、久木田賢志教授および拓殖学科研究室の皆様のご厚志に対し、この機会をお借りしてお礼申しあげたい。最後に、東洋経済新報社の黒野幸春氏には、いろいろご迷惑をお掛けしたことをおわびするとともに、感謝の意を表したい。

一九七一年四月

目次

はしがき

序章 世界農産物市場における日本農産物の地位	三
------------------------	---

第一節 はじめに	三
----------	---

第二節 農産物貿易の商品構造	五
----------------	---

第三節 農産物貿易の地域構造	九
----------------	---

第四節 世界における食糧穀物貿易の動向	一九
---------------------	----

第五節 日本の小麦輸入	二六
-------------	----

第六節 飼料穀物貿易の動向	三〇
---------------	----

第七節 世界における油脂貿易の動向	三六
-------------------	----

第八節 開放体制下の農業政策	四〇
----------------	----

第一章 世界における大豆経済の展開	七一
-------------------	----

第一節 全体的概観	七一
-----------	----

第二節	大豆の世界生産	三
第三節	戦前的大豆貿易	四
第二章	アメリカにおける大豆産業構造の分析	九
第一節	アメリカ大豆生産の發展過程	九
第二節	大豆需要の拡大と特質	一〇
第三節	アメリカにおける加工産業の展開と大豆生産への影響	一六
第四節	大豆生産の拡大と流通機構の發展	二三
第五節	アメリカ大豆の生産と輸出の發展	二五
第三章	日本の大豆經濟構造	一五
第一節	大豆生産の展開とその構造	一五
第二節	需要構造とその性格	一六
第三節	加工産業と大豆生産の関連	一四
第四章	要約	二〇三
索引		

統計表・図版目次

統計表

第1表	日本の食糧輸入の推移(一九五一—一九六七年)	一六
第2表	C・I・F 食糧輸入額の推移(主要先進国別) C・I・F 世界農産物貿易の流れ(一九五五—五七年平均) F・O・B	二〇
第3表	世界農産物貿易の流れ(一九五五—五七年平均) F・O・B	二〇
第4表	世界農産物貿易の流れ(一九六四年) F・O・B	二三
第5表	先進地域農産物輸入の伸び(一九五五—五七年—一九六四年)	二五
第6表	経済地域間の農産物貿易の流れ(一九六四年)	二五
第7表	地域別農産物輸出入の動き(一九一三—一六四年)	二六
第8表	二国間貿易における日本の農産物輸入結合度	二〇
第9表	世界の食糧穀物貿易の流れ(一九五五年)	二〇
第10表	世界の食糧穀物貿易の流れ(一九六五年)	二三
第11表	食糧穀物貿易バランスの推移(先進国別)	二五
第12表	食糧穀物主要輸入先別シェア(一九六五年)	二五
第13表	世界の飼料穀物貿易の流れ(一九五五年)	三三
第14表	世界の飼料穀物貿易の流れ(一九六五年)	三三
第15表	飼料穀物の輸入先別シェア	三三
第16表	世界における油糧種実貿易の流れ(一九五五年)	四〇
第17表	世界における油糧種実貿易の流れ(一九六五年)	四三
第18表	農林水産業投資増加率および総投資に占める割合	四三
第19表	用途別作付面積の割合	四三
第20表	主要大豆生産州の動向(A) 一九二〇年、(B) 一九五〇年	四三
第21表	大豆等主要作物の作付面積およびその変化(一九四九—六〇年)	四六
第22表	イリノイ州における大豆品種の分布	四六
第23表	経営型態別作付面積	四一
第24表	経営型態別生産数量	四一
第25表	経営型態別販売高(第II、第IV型態)	四三
第26表	経営型態別主産物の粗収益動向	四三
第27表	換金穀作農場作付面積の推移(年平均)	四四
第28表	換金穀作農場資本形成の動向(A) 資本形	四四

第29表	成と作付面積、(B) 資本形成の内訳	一〇六	第42表	シエル当り、一九五二―五三年)	一四
第30表	労働生産性の比較	一〇七	第43表	大豆油一〇〇ポンドの流通各段階における農場価格と受取分の推計値(精製ベース)	一四三
第31表	大豆・トウモロコシのエーカー当り費用・収入比較(中部イリノイ)	一〇八	第44表	都市における大豆・綿実およびその製品中の油価格指数(一九四〇―四一年Ⅱ一〇〇)	一四三
第32表	大豆油と粕の価格比	一一三	第45表	国別大豆油輸出量	一四〇
第33表	工場のタイプ・規模別大豆加工費の推計値(ブッシュェル当り、一九五二―五三年)	一一三	第46表	大豆・綿実油のPL四八〇による輸出量	一四六
第34表	「バラ粕のみ」および「バラ粕・袋詰め粕両者」生産費の比較(一九五二―五三年)	一二五	第47表	農産物の世界輸出に占めるアメリカの割合	一五
第35表	抽出法工場のコストおよび収益の推定値	一二六	第48表	豆類生産の推移(全道)	一四四
第36表	農家受取価格及び大豆生産物価格の開差(ブッシュェル当り、一九四九―五四年平均)	一二六	第49表	大豆・小豆の移出割合	一六
第37表	イリノイにおける地方エレベーターおよび加工業者の購入量(一九四七―四八年)	一二三	第50表	菜豆の輸出と道内生産の消長	一六九
第38表	イリノイにおける地方エレベーターの大豆貯蔵量(一九四七―四八年)	一二四	第51表	北海道における大豆の品種別作付面積(昭和元年、一二年)	一七
第39表	一九四〇―五三年および一九四八―五八年の大豆・トウモロコシのアイオワ農場価格の平均的季節的価格パターン	一二七	第52表	戦前(昭和八―一〇年平均)を一〇〇とした戦後(昭和二七―二九年平均)の生産・輸出入・消費量	一四四
第40表	平均的季節価格の上昇	一二八	第53表	十勝農業の地域構造	一七
第41表	農場および地方エレベーターの貯蔵費用(三・六カ月、中西部大豆生産州)	一二八	第54表	府県地帯別作物構成比(昭和二五―三〇年)	一八三
工場への特別契約による運賃節約額(ブッシュェル当り、一九五二―五三年)	一二八		第2図	アメリカ大豆の生産量・輸入量・輸出量の	九

図版

第1図	食糧輸入と国民総生産の伸び(一九六一―六七年)	九
第2図	アメリカ大豆の生産量・輸入量・輸出量の	九

第3図	推移……………	16	第15図	戦前における満州大豆の交易条件……………	154
第4図	アメリカの大豆・大豆油・大豆粕の輸出量の推移……………	16	第16図	戦後のアメリカ大豆の交易条件……………	155
第5図	農家受取価格(大豆・コーン・オート)……………	16	第17図	日本の大豆……………	160
第6図	換金穀作農場と綿作農場……………	16	第18図	大豆生産量の推移……………	161
第7図	高蛋白飼料生産量の推移……………	17	第19図	大豆作付面積の推移……………	162
第8図	油脂の供給量……………	17	第20図	大豆一〇アール当り収量……………	163
第9図	シヨートニングの原料別利用状況……………	17	第21図	北海道における大豆・小豆・菜豆作付面積の推移……………	170
第10図	工場規模別純収入(抽出法工場、一九五一—五三年)……………	17	第22図	十勝農業の地域図……………	176
第11図	イリノイにおける農場貯蔵の費用と収益(一九四六—四九年)……………	17	第23図	水稲粗収益(一〇〇)にたいする畑作物粗収入(反当り比)(A)イモ類および豆類、(B)蔬菜……………	176
第12図	大豆の輸出動向……………	17	第24図	一人当り所得と一人当り食用油脂消費量……………	176
第13図	大豆輸出価格の動向……………	17	第25図	日本の大豆油の生産量・輸入量・輸出量の推移……………	180
第14図	戦後におけるコブラの需給と価格の推移……………	17	第26図	日本の大豆油輸出と交易条件……………	181
	戦前における満州大豆の動向……………	17			

農産物貿易の構造分析

序章 世界農産物市場における日本農産物の地位

第一節 はじめに

ここ数年來の米の過剰生産、それによる食管制度の赤字累増、さらに米の作付制限等、日本農業の根幹をゆさぶるような事態が現出しつつあり、それにたいして「総合農政」の主張が打ち出されてはいるものの、その意図するところはきわめて不明確であり、混乱の色はおおうべくもない。

昭和三六年に始まった基本法農政は、ここにきてその果してきた役割や目的が慎重に検討し直されることが必要となっているのである。

こういった日本農業に課せられた困難の大きな背景として、国際環境の変化が指摘されよう。

たしかに、一部の農産物の自由化や、資本自由化の動きなど日本経済の開放体制の進展につれて、農業面に関しても世界経済の影響が徐々に及びつつあったことは否定すべくもない。

しかし、にもかかわらず、農産物の自由化率は先進国の中でもまだまだ低く、日本農業の基本的な部門にたい

する海外からの衝撃は、かなり強固な防波堤によって保護されつづけてきている。そこでは、農業政策は、貿易政策をほとんど考慮することなしに、遂行されてきたといつてよいであろう。

だが、もはや、こういったことが、不可能になりつつある。

それは、第一に、日本の国際収支の好調によって、先進国からも、開発途上国からも、ますます激しく自由化の要求を迫られてきているからであり、第二に、E E Cの動きの中で、イギリスの加入はおそろかれ必至と考えられ、そのときオーストラリア、ニュージーランドなど英連邦内の主要農産物供給国は、E E C共通農業政策に基本的な変更が加えられないかぎり、その対応策として、日本への農産物売込みを真剣に考えざるをえなくなるであろうからである。日本農業は、これをどう受けとめるべきであろうか。

第三に、今まで、発展途上国の開発政策は、あまりに工業化にかたよりすぎたことが反省せられ、農業生産に政策の重点が移りつつあるといわれる。その場合、日本の貿易政策上、とくに東南アジアとの調和的な経済関係を樹立するためにも、援助とともに、日本の農業構造の調整を考慮せねばならぬようになる。

これらは、日本農業を取り巻く国際的諸条件の一部を指摘したにすぎないが、このほかにも、より長期的な問題として、低開発地域の爆発的な人口増加にたいして、「食糧問題」の存在をも見逃すことはできない。

しかし、いずれにしても、日本農業の将来を世界的な視野の中で位置づけ、対策を立てることは、現在の急務でなければならない。

そこで、以下において、日本の農産物貿易の推移、またその世界市場にしめる位置・問題点などをあきらかにしつつ、前記の問題にたいする一つのアプローチを試みてみたい。

第二節 農産物貿易の商品構造

まず、日本の食糧輸入の動きであるが、これは一九五一年の六億二〇〇万ドルから、一九六七年の二三億三〇〇〇万ドルと三・七倍の伸びを示している。総輸入は、この間、二〇億ドルから一一〇億ドルと五・五倍に伸びており、したがって、総輸入にしめる食糧輸入の比率は、大体、一九五〇年代の三〇％から、最近の二〇％台に低下してきている（第1表。ここで「食糧」とは、SITCの0・1・22・29・4を含む）。

しかし、総輸入にしめる食糧輸入の割合の動きは、大きくわけて、(イ)五一年から五五年までの平均三二％から(ロ)五六年から六一年の一九％へと大きく低下し、(ハ)次いで六二年から六七年までのほぼ二一％へとやや増加の趨勢を示していることが看取される。

こういった動きを規定しているのは、一つは、国内生産の動向、他方に、経済成長にともなう食糧消費、パターンの変化、さらに、政策的要因（輸入自由化）等が考えられよう。一九五六年頃からの食糧輸入のウェイトの低下は、この頃から始まった農業基本法の発足にもとづく米の増産政策が顕著に効を奏したことが考えられる。とくに、米価の引上げによる価格政策、さらに財政資金による農業基盤整備のための積極的投資、さらには、耕耘機を中心とする一連の機械化の進展等が、あずかって力があつた。

しかし、六二年頃からの食糧輸入のウェイトの上昇傾向は、一つは、農業機械化進展の頭打ち、——それは、主として、経営規模の制約によるものと、資金負担能力の限度によるものであったろうが、全体的に収獲逡減の